

## 野暮な男のお話

二十一回生 平田 坦

ここに書きましたのは私がまだ現役として会社勤務をしていた頃、会社の後輩と交わした会話のお話、即ち20年も前のお話です。

東京の下町で生まれ育ち東京以外住んだことの無い「生粋の江戸っ子」を自称していた後輩が大阪支店勤務の辞令を受けました。「江戸っ子」は地方に転勤になると都落ちの気持ちになるのか訝えぬ顔 をして単身赴任をしたのですが、数年後の異動で（めでたく）本社に戻ってきました。

ある日、昼の休憩時間に彼と食堂で偶々テーブルが一緒になったので、大阪勤務中はどこに住んでいたのかと軽い気持ちで聞きました処、「大阪の北部にある吹田市の千里山と云う町に住んでいました」と云うではありませんか。急に親近感を覚え、膝を乗り出しました。「そこは

私が小学校の頃から青年時代まで長い間住んでいた処で懐かしい」と伝え、千里山のどの辺りに住んでいたかと尋ねましたら、「駅を降りまして少し坂を上がりますと噴水のあるロータリーがありまして、その傍にあるコンビニの処を右に折れまして、数軒先のマンションでした」との返事。多分、往時にはクリーニングの朝日屋さんや、魚屋の魚芳さんがあった辺りだろうと推察しながら、更に、「その辺りは私が悪方キ仲間と一緒にわが庭のごとく走り回っていた場所だ。住み心地はどうだった？」と、期待を込めて聞きました。

処が、彼は暫く間を置いてから、ポツリと「退屈な処でした」と曰わった。怪訝そうな顔をしている私を見ながら「近くに娯楽施設も無いし（パチンコ屋などの類いか？）レストランや飲み屋も少なく、週末は時間を潰すのに苦労しました」と付け加える始末。

やや頭に来た私は立て続けに千里山礼賛をぶつてやりました。以下はその折りの会話の一部です。

「戦後、日本中が荒んでいた頃から、千里山には大阪のどこの町と比べても一味も二あじも違う文化の香り漂う雰囲気があった。あの町には世俗的な娯楽施設や風俗店

などは馴染まない。小さなコミュニティながら、ほぼ時期を同じくして著名なアスリート、偉い大学教授、宗教家、音楽家、財界人などが住んでいたのである。そういう人たちに道で会うと時には優しく声をかけてもらったりして身近に感じたものだ。住宅地は桃畑や竹林に囲まれ、高台に登れば晴れた日には南に大阪平野、その向こうに生駒山や金剛山別の場所からは六甲山も遠望でき、子供ながら気宇壮大な気持ちになった」と往時を沸々と回想しながら如何に千里山は素晴らしい処かを口角泡を飛ばす勢いで話してやりました。

しかし、反応はただ「……」。

そこで一歩突っ込んで、各界を代表する著名人として、アスリートはオリンピックの金メダリスト織田幹雄・南部忠平、アジア大会金メダリスト南部敦子、学者としては関西大学学長の矢口孝次郎、音楽家の伊達三郎、キリスト教牧師の河邊貞吉・満襲、経済界では日の方斎、安藤百福、藤田 田、小説家の筒井康隆などを挙げました。千里山人なら誰でも知っている名士の名前ですが、相変わずピンと来ないらしく、またもやほぼ無反応。お話になりません。ほんの数分前に湧き上がりかけていた彼の親近感はいくもなく消え去りました。

昔は関東人を無粋な東夷と呼んで蔑んでいた時もあったそうですが、平成の時代の今もそのDNAを背負っている野暮な人間が存在するのを再認識する思いでした。

一方、彼にして見れば、半世紀以上も前の小さなコミュニティの事について恰もユートピアの如く自慢げに話している老社員の話しを「野暮な男もいるものだ」と内心蔑みながらじつと我慢をして聞いていたのかもしれない。

今になって思うと、我々千里山人が誇る諸氏についてもう少ししっかりと説明が出来ておれば、「野暮な江戸っ子」も若干は感動してくれたかも知れないと悔やむ処があります。あとの祭りですが、ネットで検索しました処私自身も正確には知らなかった事や、私なりに補足した事なども出てきましたので此処に追記致します。

織田幹雄：1905-1998。1928年アムステルダム五輪で日本人初の金メダリスト、三段跳び。

尚、余談ですが、三子息は会社の同僚でした。テニスの名手で今上天皇が皇太子であられた頃のテニスのお相手をしていましたが、美智子さ

まとの間が公けになるまで密かにお二人の間の連絡係を勤めた人物です（NHKの番組で皇太子恋物語の放映がありました、彼が自ら経験談を話していました）。

南部忠平：1904-1997。1932年ロスアンゼルス五輪で金メダリスト。三段跳び。世界新。終生の親友となつた織田幹雄と2人して関西大学運動場で猛練習していた由。

南部敦子：1934-1970。南部忠平の長女。1954年マニラでのアジア大会で100メートル金メダリスト。その人柄が、アジア大会の折り、フィリピン国民の対日感情の改善に大きく寄与したと云われています（千里山会誌12号、13号、会員の寺澤美代子氏記事を参照）。私が高校生の頃、松村信男さん（会員）に誘われて彼女が関大の運動場でひとり練習するのを見学に出かけ、トラックの傍らに置いてある着替えの番をしてあげたことがあります。今は懐かしい思い出です。残念な事に1970年に交通事故で早世されました。

矢口孝次郎：1903-1978。第22代関西大学学長、経済学者。

経済新聞「私の履歴書」に執筆された記事の中で、「千里山在住時は戦後の

食糧難時代で、庭にヤギを飼いその乳を家族に飲ませていた」と書いておられます。

したが、私も自宅にお邪魔した折りにその乳を「馳走になった事を覚えています。

（一）長男の宏太郎君は千二小のクラスメートでした。

河邊貞吉：1894-1953。経済人として渡米したが、現地でキリスト教伝道者となる。日本でのフリーメソジスト教団先駆者。

元外務大臣松岡洋右がアメリカ合衆国オレゴン州ポートランドで留学生として滞在中に河邊貞吉と出会い大きな影響を受け、彼を信仰の父・実父に代わる第二の父として仰ぎ終生交流を大切にされた由。

河邊満穂：1897-1970。河邊貞吉の長男、関西学院宗教学部総主事。

阪急千里山駅の北側にある4500坪の丘陵をシオンの丘と名づけ、そこに単立河邊貞吉記念千里山基督教会を創設。シオンの丘を中心に千里山を「ゆりかごから天国まで」の理想郷とする

大学の偉い先生のお宅とは聞いていましたが、玄関口がセメントの叩きとなっていて、べったん（メンコ）の遊び場として相応しかったので、構う事無くそこで遊び興じました（当会の故黒川高秀元会長も仲間でした）。ある日、先生らしき方が玄関から出て来られて散らかっているべったんを微笑みながら跨いで外出された事がありませんでした。

伊達三郎：1897-1970。関西交響楽団および後の大阪フィルハーモニー交響楽団の首席チェロ奏者。大阪音楽大学教授。長年朝比奈隆と演奏活動を共にした一方、独奏者としても有名。

演奏会に出演される伊達先生が大きなチェロのケースを抱えて大学前駅から電車に乗られるお姿に何度も接しました。

尚、現在活躍中のチェロ奏者 Goshino Ogawa（小川剛一郎）は伊達三郎のお孫さんで幼年時から祖父の指導を受けて育つた由です。

日向方斉：1906-1993。後の住友金属社長・関経連会長。当時の関西財界オピニオンリーダー的存在で中央の権威に対しても堂々と論陣を張り信念を持った経済人との評判でした。

夢を持ち続けておられました。

安藤百福：1910-2007。台湾生まれ、後に日本に帰化。様々な事業を手がけ浮き沈みのある経歴を経た後、チキンラーメンを開発、さらにカップヌードルも発明。日清食品創業者。

藤田 田：1926-2004。東京大学在学中に藤田商店設立。日本マクドナルド、日本トイザラス創業者。日清食品創設者の安藤百福とは近所付き合い仲であつた由。

尚、田というのは珍しい名前ですが、お母上がクリスマスチャンで息子が正しく汚れの無い言葉を話すようにと口の中に十字架がある田という文字を選んで命名したという逸話があります。

筒井康隆：1934-。小松左京・星新一と並びSF作家御三家の一人。現在小説家・劇作家・俳優として活躍中。

私の少年時代、ご本人はまだ学生でいわば無名でしたが、動物生態学者のお父上、筒井善隆氏（初代大阪市自然博物館初代館長）は、ムカデなど色々なゲテモノを食べるとどんな味がするかなどと云つた面白い話を雑誌に書かれていたので我々には人気者でした。 おわり